谷村館と関連して、その背後の通称城山といわれている勝山城を問題にしなければならない。現状での遺構は、すでに池田誠氏によって詳細な報告がされているように（同前）、近世初頭の豊臣政権下の加藤氏、浅野氏時代に構築されたものが多いとのことである。しかし一方では前述した谷村の小山田氏館との関連でその詰城であったとする意見も根強く、城館址と同様に、同一地域での後世の改修によって、古い遺構が確認しにくいといった側面も捨てきれない。文献上では小山田氏時代に勝山城を使用した形跡のみられるものは皆無であるが、居館と一体化した詰城の存在を想定した場合、後述する岩殿城がそうした機能の城でなかったとするならば、勝山城こそが詰城であったとの意見は有力である。小山田氏の領主制展開の過程で、勝山城を積極的に使用しなければならないような局面はなく、従って当初にどれ程の城郭としての機能が設備されたのかは疑問が残るが、それにも増してより必要性の薄れた豊臣期において大規模に修築している点は、小山田氏時代に同様の役割を果していたことを推定させる。

勝山城を小山田氏時代からのものと主張されたのは、窪田薫氏であるが（「都留郡勝山城を探る」『甲斐路』三一号）、現状遺構図をみても明らかなように、自然地形がすでに城郭化したものであり、人工的な防禦施設は最小限のもので効力が発揮できる地形であるから、その可能性は高い。曲輪部分は方形に削平されており、虎口（こぐち）・堅掘・土塁とともに人工的なものであるという。今後も、文献・遺物などによって、小山田氏時代からのものである点を証明することはむづかしいかも知れないが、考慮の余地は大きい。

図2-3　勝山城縄張図（作図：池田誠「中世城館址」資料編古代・中世）